

るの は な

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同 窓 会 報 編 集 部

〒280 千葉市亥鼻1-8-1

千葉大学医学部内

るの は な 同 窓 会

電話千葉 (0472) 22-7171内線2038

千葉大学医学部同窓会報 第87号 題字 鈴木 五 郎

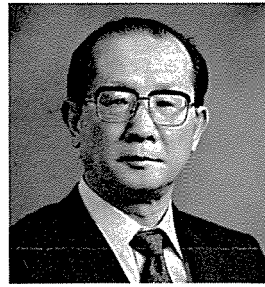
吉田医学部長 (昭和23年卒)

就任一年余の所感をよせる

昭和五十九年八月一日付けで医学部長になられた吉田亮氏に、就任一年余を終った所感と近況報告を寄稿していただいた。

医学部長 吉田 亮

医学部長に就任し一年四カ月経過しましたので、近況をご報告して、ご挨拶にかなえたいと思います。



一、医学部学生定員の問題

医師過剰がいわれ、厚生省の中間報告をうけて、国立大学医学部長会議では「学生定員に関する専門委員会」を昭和五十九年十月に発足させました。山形大、群馬大、東京大、東京医科歯科大、愛媛大（その後、東北大と九州大が加わる）と本学の医学部長がそのメンバーですが、小生が委員長を仰せつかる羽目となり困惑いたしました。が発足後約一年間に七回の会合を持ち、この十月に「中間報告」を発表いたしました。これは「医学教育の目的、目標、入学者選抜、教養課定における教育、医学部専門課程カリキュラムから卒業後医学教育迄の、医学教育全般の「あるべき姿」を考え、現状との比較の

上で、「適正な学生数」を考えるといった、格調の高い論文です。現在、関係者に幅広く配布し、ご意見を求めているところです。

二、医学教育の改善に関する調査研究協力者会議について

本年一月に、文部省が設けた会議で、東京大学森学長はじめ国公私立大学の学長あるいは医学部長

加納六郎教授 (昭和20年卒)

東京医科歯科大学学長に就任

東京医科歯科大学医学部医動物学講座の加納六郎教授は、此度同学学長の栄誉を担われることになり、去る八月一日付で発令をみた。加納学長は、昭和20年本学卒業後、昭和29年東京医科歯科大学助教

北川定謙氏 (昭和31年卒)

厚生省局長に栄進

昭和31年本学卒業後、一貫して厚生行政に献身しておられる北川定謙氏は、去る八月二十七日の閣議決定により厚生省生活衛生局長の要職に栄進された。北川氏は、医務局国立療養所課長、公衆衛生

合計十名がメンバー（委員長は慈恵医大の安部学長）です。これも現在迄、八回程の会議を開き、各方面から医学教育改善の方途を検討していますが、小生もその一員として大いに勉強させていただいております。

三、アメリカ四大学の医学教育の視察

前述した次第で、にわかに医学教育への関心を強めておりますが、文部省の在外研究員として愛媛大学の柿本医学部長と二人で、本年三月二十四日（卒業式の翌日）から、四月四日にかけて、イリノイ大学、ミシガン大学、ケース・ウエスタン・リザーブ大学、クリーブランドクリニック、ワシントン

大学（シアトル）を訪問し、アメリカの医学教育の実情を視察しました。その報告は、「医学のあゆみ」一三四（三）二〇五—二〇八、「厚生福祉」No. 三四〇〇、「医学教育」一六（六）四四九—四五八等に発表しておりますので、ご一読いただければ幸いです。

四、渉外問題

医師過剰の問題とも関係して、渉外問題は強力に進めるべき課題の一つと考えます。渉外委員長および関係される先生方とご相談し努力しておりますが、幸いにして帝京大学市原分院に臨床五系列と臨床病理を含め、本学より約三十名の優秀な人材を送ることになりました。今後、本学との強力な絆となつて発展して下さることを期待しております。その他、国立病院の統廃合の問題を含め、この分野での課題は山積みしております。同窓会の先生方のご協力を切にお願いする次第です。

五、学部内の諸問題

千葉市との間で、昭和四十二年以来、懸案となつておりました都市計画道路「西千葉駅稲荷町線」の医学部（附属病院）構内通過の問題も、一応の解決の目途がつきました。昭和五十九年一月から小生も関係するようになりましたが、亥鼻地区統合整備委員会の下に、専門委員会をつくらせていただき、十一回余りの会議を通じ、環境保全の立場から、協議をかき進めました。市も当方の希望をほぼ全面的に認め、対策をたてる等、一つの都市計画道路としては、かなり立派なものができ上ると思っています。

医学部長として、最大の問題は学生の教育の改善と、研究環境の整備だと考えております。現在、村山智教務委員長を中心として、カリキュラムの検討が続けられておりますが、今日ほど医学教育の改革、改善が緊急のこととして社会的に要請されている時代でもあります。医学部長としては、大いに発言し、皆で活発な討議をくりかえし、よりよいものを創り出していきたいと考えております。

一方、バイオサイエンス研究をはじめ、先進医療をめぐる周辺科学の進歩はすさまじいものがあります。この面につきましても、昭和六十一年には、一応の構想を確立したいと思っております。

るの は な 同 窓 会 の 先 生 方 の、絶大な御支援、御指導をお願い致します。（公衆衛生学講座）

藤村真示教授 (生化学第一講座)

日医医学研究助成費を受ける

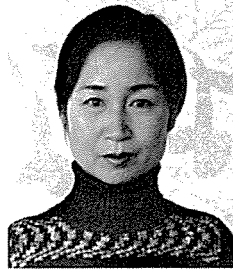
去る11月1日、本年度の日医医学研究助成費の授与が行われたが、本学生化学第一講座の藤村真示教授（昭35卒）は、「癌など細胞増殖における四種のリボヌクレオシド二リン酸還元酵素に関する研究」により栄える助成費（百万円）を受けられた。先生の地道な研究が評価されたことは同慶の至りである。

現在、村山智教務委員長の下で進められているカリキュラム再編成については、次号に掲載する予定です。（編集部）

近頃の思い

眼科学講座
安達 恵美子(昭和37年卒)

昭和五十九年五月に教授に就任して以来一年半ほど経過したが、浜松医大に六年、本学の助教として四年、専ら補佐役に徹していた十年間は、学問を満喫出来る立場であったことを今更、感慨深く思い出している。ひと度、教室を担ってみると、管理の Know how を学んでおかなければならなかったと反省している。その反面、新鮮な思いもある。医局員の中に入りこむことで、前向きの姿勢は培

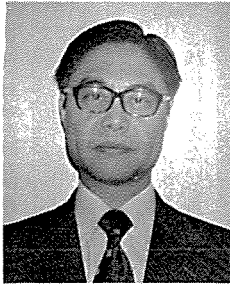


われると思う。ただし、余り密度が高くなると焦点が薄れることも自覚しながら、明日は、明日はと臨床に追われている。

そもそも眼科というのは、その歴史を顧みると、臨床以前に Newton, Young, Helmholtz と物理学者により発展の基礎が置かれた。発祥を物理学に負っているの

で、今日のコンピュータ化、光学機械の発展の方向は、診療手法にかかわるある種のノルマとして扱わなければならない。さて、教育は大学でしか出来ないからと、出席数の心もとい学

教授に就任して

寄生虫学講座
小島 莊 明(昭和40年卒)

ご挨拶が遅れましたが、恩師・横川宗雄教授御退官の後を受けて、一九八五年一月より寄生虫学講座を担当致しております。七年余りにわたる信州大学在職中は、同窓の諸先生方から公私共に御指導と御支援を賜りましたこと、改めて

感謝申し上げます。特に、長野県のはな同窓会の諸先生には親しく御交いを戴きましたことを懐しく思い出ております。さて、最近の新聞やテレビなど

道があり、あたかもビルの中を往来する感を持たせていたから、今ほどの異和感はない。浜松医大も屋根根っこであった。そうとはいえず、検査室、手術室として病棟と階から階へと動きまわること、不満はあるにしても慣れきてはいる。前向きの姿勢で、抄読会、症例検討会、会議等は医学部本館で夜行うように変更はしたが、患者についての緊急の対応にはより不便になった。連絡道路はそれでも美しい。せめてそこに地下道を作って欲しいと切に思う昨今である。

創立十周年を迎える



日本で唯一の学部として看護学部が創設されたのは昭和五十年のことであった。二講座より出発し現在十一講座と三部門を誇る充実ぶりである。去る九月二十一日午後二時より、医学部記念講堂にて式典、続いて看護学部にて祝賀会が開催された。式典では石川稔生看護学部長が創設準備室以来の経過を報告しつつ苦難の中にも着実に

常任理事会報告

去る九月二十七日、改選後第一回の常任理事会が開かれた。議題として①役員追加。これは各支部の支部長で総会における理事推薦のなかつた方を常任理事会として追加するため、並びにクラス推薦理事のアンバランスを調整するためのもので、次の十三氏の追加が否られた。百瀬孝男(長野)、矢端秀男(群馬)、天野富馨(山梨)、渡



るのはなキャンパス正門には今まで古ぼけて字の消えかかった木製門標が付けられていたが、この度、門柱の化粧直しと共に、銅製の新しい門標に取り替えられた。正門右側門柱には医学部(右写真、左側には看護学部の門標(別掲))が掲げられ、去る7月26日、吉田、石川両学部長出席の下で除幕式が

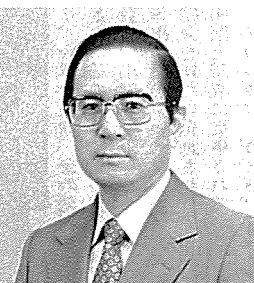
取り行われた。門標の録書は鈴木清三郎事務官の筆による。

本年度(昭和六十年)の同窓会費(二千元)未納の方は是非お納め下さいませ様お願い申し上げます。振替用紙を同封申し上げます。

迎宗次(栃木)、村尾正(静岡)、吉田良夫(山形)、小倉一郎(江戸川)、川島恂二(茨城)、中村武(静岡)、末永直光(神奈川)、古寺秀喜(九州)、三橋公平(北海道)、児島三郎(秋田)。これらの方々は明年度総会において追認される予定である。②社会福祉事業団からの申し入れについて。同事業団は医療金融公庫と社会福祉事業振興会とが統合して出来たもので、新事業団の業務につき紹介したいので、同窓会報に記事のない広告を掲載する事についての問合せがあった。協議の結果、事業内容については周知である事、同窓会報には従来から広告が載せていない事等から、取り扱いは遠慮することとした。③その他、東海海上火災から保険代理店についての説明を聞いたが、なお他大学等における状況を見てから判断すべきであるとの結論に達した。

なお、常任理事会に引続き、五時三十分より改装成った同窓会館において四金会が行なわれ、盛会であった。(萩原彌四郎記)

教授就任にあたって

外科学第二講座
磯野可一(昭和33年卒)

この度、千葉大学第二外科科学講座を担当することになり、その責任の重さを痛感しております。

第二外科教室は、教員約70名先輩諸兄約400名を有する大教室であります。「ローマは一日にしてならず」の言葉通り、これら先輩、

教室員が日夜血と汗と涙で築いた誇らしい殿堂であります。日本の食道癌治療の草分けが瀬尾貞信先生によってなされ、その飛躍的発展を担い、その名を国の内外に広められたのは中山恒明先生であり、そして、佐藤博先生となり、移植、透析、栄養などの分野が加わり多方面での活躍は衆目の的となっておりです。このように大きく渦巻く輪の中心に投入された自分自身は、その渦巻を更に大きく動かす継続の原動力にならなければならぬと自覚しております。又、単に、この輪を広げるだけでなく、青く澄んだ水の中で静かに絶えず大きく躍動し、誰が見ても「美しい」と感ずるものにならなくてはならないと思っております。佐藤先生は教授就任の時「和」の

磯野可一(昭和33年卒)

精神を強調されました。私は就任が決まった時、教室の先生方に「信頼」の二字を掲げたいと強調しました。人を信じ、誰からも信じられることが大切であると、「信頼の輪」の上に成り立つた和を求めたいと考えております。

教授選に立候補してから大学の連絡道路に立ち止まり、千葉大学に入学してから30余年、自分の青春時代の大部分を過ごして来たこの亥鼻山の景色を幾度となく万感の思いを込めて眺め、深く自分の脳裏に収めました。そして、何時の日か、ここを去る時が来るであ

川村光毅氏(昭和36年卒、岩手医大教授) 岡山大学教授に転任

川村光毅氏(昭和36年卒、岩手医大教授)

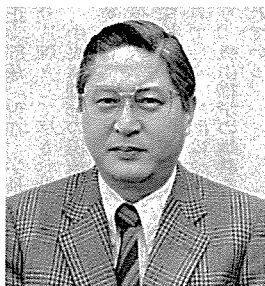


川村光毅氏は本年七月、岩手医大解剖学第一講座より岡山大学医学部解剖学第三講座主任教授に転任された。同氏は昭和36年本学を卒業し、松本 胖教授(精神医学教室)と大谷克己教授(第三解剖学教室)の指導を受けた後、岩手医大教授を十二年間務められ、

ろうと思いつつも悔めることなくついでに春の日々に満足を感じていました。そして、教授に選ばれ再び連絡道路に立ち、与えられた自分の職責を噛みしめ千葉大学発展のために惜しみなく尽くすことを一人心に誓ったのがこのことでありました。

自分自身に与えられた教育、研究、診療の道を自分のベースで悔いすることなく歩み続けたいと思います。今後、皆様方の御指導、御協力の程お願い致します。

名古屋市立大学教授に就任して

整形外科科学講座
松井宣夫(昭和38年卒)

昭和32年千葉大学医学部医学進歩課程に入学以来、二十八年間生きた千葉市を離れて、昭和60年9月1日付けで名古屋市立大学医学部の整形外科主任教授として名古屋に赴任してまいりました。長い間、千葉で世話になりました。諸先生方、職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和18年4月に開設された名古屋市立女子医専であり、昭和22年に女子医科大学に、25年4月に名古屋市立医科大学に昇格し、更に医学部と薬学部の二学部で名古屋市立大学が同時に発足しております。昭和39年には経済学部が加わっております。整形外科教室の創立は昭和26年で、上田文男教授(現名誉教授)が名古屋大学より赴任された時に始まりますので、

千葉大学整形外科教室が昭和29年に故鈴木次郎教授により始められたのに比べると、こちらの方が三年古いことになります。教室の業績は上田名誉教授の時代から続いている先天性股関節脱臼を中心とした小児グループによる研究の他、斜頸、内反足治療に関するも

のもあります。昭和45年に上田先生が退官されると、故松井教授が二代目教授に就任されました。松井教授はA-I-O法を我が国に導入された先駆者であり、骨折や関節疾患に関する研究、リウマチ、脊椎外科、電気生理、腫瘍に関する研究と幅広い研究分野をお持ちでした。教室同門は百七十名に達し、関連病院も三十近くあり、卒業研修も円滑に進められております。

私は、三代目の教授であり、上田名誉教授、松井教授と続いた伝統ある教室に、千葉の鈴木 井上両教授に学んだ流を調和をとつつ加えて、より大きな河とするのが私の任務と考えております。

今後とも益々の御指導、御鞭撻をお願い致します。



祝 昭和60年度 叙勲

春の叙勲

勲三等瑞宝章

内田

孝先生

(昭和11年卒)

勲四等瑞宝章

大倉正二郎先生

(昭和14年卒)

秋の叙勲

勲三等旭日中綬章

篠崎 幸一先生

(昭和15年卒)

勲四等瑞宝章

内海 武夫先生

(昭和16年3月卒)

第80回医師国家試験 委員公表される

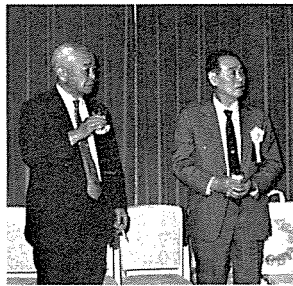
昭和61年4月5、6日に行われる医師国家試験施行要領が9月13日付け官報で発表された。試験科目は内科、外科、産婦人科、小児科、公衆衛生の必須五科目に皮膚科と眼科を加えた七科目で、合格発表は5月14日。同時に公表された85名の試験委員の内、あのはな同窓会関係者は次の諸氏である。

有木昇(千大放射線科)、小幡裕郎(東大医大、消化器内科)、金子敏郎(千大、耳鼻咽喉科)、小泉準三(筑波大、精神医学)、平山恵造(千大、神経内科)。

各地るのはな会だより

東京るのはな会総会

昭和60年6月22日(土)、神田駿河台の上ホテルにて、東京るのはな会総会が開催された。中村民比古会長の挨拶、物故者への黙祷の後、恒例の会務報告、会計報告があった。本年度は役員改選の年に当たっており、次期会長には永井義三先生(昭10年卒)【写真右】が満場一致で選ばれ、二期六年にわたって会長を務められた中村民比古先生(昭13年卒)【写真左】からバトンタッチが行われた。中村前会長は城北支部から墨東および城東支部に会長職を引き継がれてよ



り、会員の親睦、会の発展に努力され、その結果会員の総会や新年会への出席率も上昇した。また本学出身者の多い大学、病院との連絡会を新たに企画され、第一線臨床医と研究に従事されている方々とのコンタクトができ、東京るのはな会は一層意義のある会となった。その功に報いるため、当日の清川素道議長(昭16年卒)より記念品が贈呈された。

次いで、『免疫学最近の話題から』と題して、東京大学教授田富雄先生の御講演があった。先生が岡林病理学教室に入られてから、サプレッサT細胞を発見されるまでの研究の苦労話から、最近の免疫学の知見まで、ユーモアを交えてお話し頂き、会員に多大の感銘を与えた。

引き続き山崎衛城東医師会長(昭19年卒)の司会で懇親会に入った。来賓の萩原教授より、大学の近況についてお話し頂き、新任の小島莊明教授(寄生虫学教室)より御挨拶があった。墨東並びに城東支部当番最後の会という事もあって、あちこちに歓談の輪が作られ、華やかなパニールールのサービスもあって、いつにも増して盛り上った会となった。新会長の下での次回東京るのはな会の盛会を祈念し

群馬大学医学部だより

生理学第一講座教授
三浦光彦(昭和34年卒)

群馬大学医学部は前橋市の北、利根川のほとり、赤城・榛名・浅間の名山を望む景勝の地に立つ。昭和18年、前身の前橋医専が眼科医石原校長のもとに発足して以来、42年の年輪を重ね、病棟・研究棟が所狭しと建並ぶ現在の賑わいに至っている。その一つの建物に内分泌研究所があるが、これは昭和26年に始まり、日本中見渡しても類似のものはないというユニークさを誇っている。形態部門の教授は初代の野中俊郎氏(故人、昭18卒)、二代目の黒住一昌氏(昭24卒)とい



基礎医学研究棟

ずれも千葉の出身である。最近、黒住教授が新制日本学術会議議員に選ばれたことは前号に詳しく報道されている。持前の強烈

なバリトンで学術振興のために強言を吐いて下さることを期待している。

もう一つユニークな機構に行動医学研究施設がある。行動生理部門の平尾武久教授(昭24卒)は、東大脳研の故時実利彦教授の高弟で行動学という未開の分野の開拓に挑戦してこられた。峻厳な論客と

つ、午後7時、散会となった。神田尚忠(昭和32年卒)記

九州るのはな会

昭和60年2月23日(土)、鹿児島市の料亭「玉村」で九州るのはな会総会を開催した。第一回福岡、第二回久留米について今年は第三回目で、幹事の来仙隆先生、鹿児島大学、津金沢督雄先生はじめ鹿児島地区の先生方にお世話いただいた。

まず、昨年一年間の活動報告、支部規約の検討、会長に古寺秀喜先生(昭22卒)を推薦、支部事務局を久留米大学第二内科谷川久一(昭32卒)のところに置き、本部との連絡に当たることを確認した。一年振りの再会に時の経つのも忘れ、尽きせぬ思いを語り合った。御出席の安中先生は、今も現役として御活躍中であり、お酒も強く心強い限りである。次回は佐賀地区の森永宗雄先生にお世話いただく

してその名を轟かせた平尾教授も還暦を迎えられてから温和なまじめ役に徹し、難題の一つであったカリキュラム再編成のために前川正学部長(現在、学長の)の文字通り片腕として尽された。

中央検査部の田波洋教授(昭25卒)は、微生物学教室の出身で、信州大学を経て群馬に招かれ、臨床検査部門の創設と充実に努力されている。専門はウイルス学であり、微生物学の講義を一部担当されている。

以上の三教授より一時代後輩教授として、生理学第一講座の三浦光彦(昭34卒)、寄生虫学講座の鈴木守(昭39卒)氏がいる。三浦は千葉の第一生理学教室と第二内科学教室で学び、猫を使って循環調節の脳機構を30年近く続けている。

恩師の斎藤十六先生から今でも時々激励の言葉がかかる。鈴木守教授は公衆衛生学教室に一時席を置き、やがて東大医科研と東海大学で修業した。専門はマラリアの免疫。そのためか、国外で活躍され

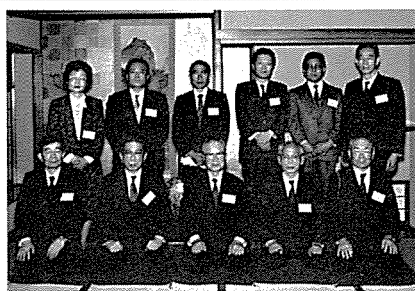
ている時間が多い。東南アジア、アフリカ、カリブ海の諸国からの研究者の訪問で、寄生虫学教室は国際色豊かである。

この大学の歴史をみると、開学当時の教授陣の中に解剖学新島勉氏(故人、昭9卒)、公衆衛生学柳沢利喜夫氏(昭5卒)の名が見られる。薬理学の小林龍男名誉教授から、第二次大戦中に出征した柴田勝博教授の代りて講義を担当されていた思い出話をうかがったことがある。

こうみてもくると、群馬大学と千葉大学とは同じ関東の地に在って浅からぬ縁で結ばれているようである。

地元るのはな同窓会は矢端秀男先生(昭9卒)が音頭をとっておられる。同窓会全体が老令化しているの若い人は仲々参加しにくいようであるが、毎年確実に20人のOBが参加する。こ、数年、群馬大学からゲストが一人ずつ招かれて話をするのが例となっている。

ことに決まり、来年を楽しみに散会した。早春の風はまだ冷たくともさすがに南国、明るい夕空には飛燕が群れ我々の旅情をかきたてた。九州地区は母校から遠く、また会員も広域にわたっており、何かと連絡不十分なので、その点を改善し、本会を発展させたく願っています。母校の現状や、新しい会員の情報などよろしくお願い致します。出席者、安中正哉(昭5卒)、来仙隆(昭18卒)、西克己(昭18卒)、森下博夫(昭19卒)、古寺秀喜(昭22卒)、森永宗雄(昭22卒)、西高広(昭23卒)、谷川久一(昭32卒)、谷川章子(昭33卒)、津金沢督雄(昭34卒)、日笠山一郎(昭42卒)。(谷川章子記)



クラス会、あのはな会便り等は十五字二十行縦書き原稿用紙で二枚下さい(厳守願います)。にまとめで下さい。編集の都合上、一部を短縮または割愛させて頂くこともありますので、何卒御了承下さいます様、お願い申し上げます。

クラス会報告

昭和28年卒 クラス会

昭和28年千葉大学医学部卒クラス会は、去る昭和60年10月5日（土）、都内永田町東急キャピタルホテルで開催された。今回は同級の水口公信君が国立がんセンター麻酔科より母校麻酔学講座の主任教授に昇任したのを記念して、その祝賀会も兼ねていた。例により、都心に顔の広い小沢雅亮君のお世話によって、細かい設営、交渉等

二十九年卒級会

卒業後三十一年をむかえたわが級は、都会の塵をはなれて、緑豊かな栃木県那須温泉「山楽」に、本年六月二十二日（土）午後七時、ご夫人を含めて総勢三十五名が集合、なごやかなクラス会を開催した。本年度の幹事長は地元、氏家町で産婦人科を開業している森島邦夫君で、その並々ならぬお骨折りに、一同感謝した次第である。会は型通り庶務、会計報告など、まず常任幹事長の島崎淳君（本学泌尿器科教授）から、千葉大学医学部 附属病院の近況、級会員の動向および昨年の卒後30周年記念植樹（医学部本館正面玄関前、実験動物施設玄関前左側に山桃を寄贈した）について報告がなされた。



続いて級会員から、日進月歩の医療に即応できるような情報提供の早期伝達、医師過剰時代に対応できるよう千葉大学の地方病院への積極的進出などの意見が出された。

円滑に進められた。相集う同級生は総勢43名。遠く信州須坂から馳せ参じてくれた熊谷信夫君に乾杯の音頭をとって頂いた。それぞれ卒業後三十余年の年輪を数え、年令は致し方ないが何れも元気で、近況を語り、水口君の今後の活躍を期待して夕刻八時過ぎ散会した。なお、本クラス会は昭和58年に、卒業三十周年を記念して、ゐのはなキャンパスに京都の植藤造園から購入した「しだれ桜」20本を植樹した。（奥井勝二記）

五五会

（昭和30年卒業クラス会）

昭和30年3月卒業生百七名は、昭和43年に同級から解剖学の永野教授が誕生して以来、毎年一度の同級会を欠かさない。五五会とは昭和30年が一九五五年であることと、ゴードンズの流行があった頃であることに由来し、青木淳君が命名した。

昭和60年6月15日には、同級生からの入局者が一番多かった第二外科の中山恒明先生を迎えて、北は秋田県酒田市の鈴木誠君から、南は那覇市、琉球大学の中野政雄教授まで四十七名の出席者を得て、都内、内幸町の帝国ホテル亀の間で五五会を開催した。席上、卒業30周年を記念して編集した、クラス全員の卒業の略歴や近況の他、家族を含む写真を掲載したA四判百十七ページの記念誌を全員に配布した。後日、中野君からの手紙が届き感謝している。（当番幹事 浅見 敦記）

五五会より編集部卒業三十周年記念誌が一部寄贈されました。厚く御礼申し上げます。（編集部）

故伊藤 齊先生を惜しむ

村 山 智（昭和26年卒）

去る八月三十日に亡くなられた伊藤齊先生の告別式が、九月十九日に信濃町の千日谷会堂で先生の日頃のお考えに沿われたりか、花を捧げてのお別れの形でのり行われた。先生は昭和二十五年の本学卒、東大伝研を経て慶大精神神経科学教室に入り、助教授としてまさに活躍のさなかであった。精神薬理学的立場から臨床に携わり、国際的にも幅広い活動をしていられた。「向精神薬」の序文の一節

クラス会誌拝見

『さんろく会』会報

千葉医専以来、本学には九十余のクラス会が存在するはずで、その各々が定期的あるいは折りに触れて集い、旧交を暖めているものと思われる。しかし、定期的に会報を発行し続けているクラス会の数は限られて、今回、ここに紹介する『ゐのはな』『さんろく会』会報は、こうした同級会誌のひとつで、昭和36年卒業のクラス会によって

前半には、最近四年間の同級生や、亡くなった級友の家族からの便り、クラス会報告等が写真を豊富に使って書き綴られている。表紙や本文の素晴らしいイラストも会員（小越章平氏）の作品である。後半は級友からのハガキを写真製去への憶いや、また夫、父あるいは祖父としての著者の『現在』が見事に謳いあげられている。身内や友人への挽歌や病床に伏す日々への憶いを詠んだものが多いのも特徴といえよう。半世紀は額帯鏡と歩みたり 喜寿を越えたる 明日もかくこそ（青垣義書第七十篇、昭和60年6月出版、至芸出版社）（A・T）



千葉市内各所を会場に 各種医学学会開催さる

日本臨床生化学会 昭和60年10月17、18日 肺癌研究施設内科渡辺昌平教授が会長となり、第22回日本臨床生化学会総会が開催された。特別講演は渡辺会長の座長でコラド大ワイル教授による「健全及び疾病における低酸素に対する心脈管および呼吸の反応について」と岐阜大平川千里教授の「ピト肺静脈系の伸縮一左室プレロードを支配する今一つの因子」が行われた。シンポジウムは、稲垣義明教授(第三内科)らの司会による「画像情報と病態」の他、「冠循環研究の最近の進歩」、「肺性心をめぐる一血行動態を中心として」、「肝門循環系の病態生理と臨床」、「妊産婦の循環」の五演題であった。パネルディスカッションは本田良行教授(第二生理)らの司会で「呼吸調節障害とその対策」として病態生理から治療まで取り扱われた。一般演題二九〇題は循環一五〇題(負荷、血行動態、冠循環、心力学、脈波、呼吸八五題(呼吸調節、肺循環、換気力学、呼吸不全)の他に神経、内分泌代謝、消化器、産婦人科等多方面からの報告があった。注目すべきは肺循環の演題が四五題を越した事で、これを一括してワークショップ形式とし、総合同会者のもとで各演者とフロアとの間に充分な討論の機会が持たれ大きな収穫が得られた。渡辺会長の「循環と呼吸の相関性ないしその接点を求めて」

を大きな柱とした本学会は成功裡に行われた。(福田 隆記)
日本脈管学会 10月31日より11月2日の三日間にわたって第26回日本脈管学会総会が稲垣義明会頭のもとで開催された。全身の脈管系を対象とする学会のため、基礎・臨床から七三七題もの一般演題が集まり、参加者も二千人を越え盛会であった。会頭講演は「脈管疾患に対するX線CT、NMRICT、ボジトロンCTの役割と相互比較」であり、この中で会頭は第三内科設立以来十年間の教室の画像診断の進歩について温書をかためて講演され、会員の深い感銘を得た。招待講演はカルフォルニア大Carlsson教授に「The role of cardiac imaging in ischemic heart disease」特別講演として熊本大第一外科宮内好正教授(昭30卒)の「腹部大動脈瘤」外科治療の問題点、北里大内科木川田隆一教授(昭30卒)の「低血圧症の循環動態をめぐる」等五つの講演、脳研薬理萩原彌四郎教授の司会による「心脈管系とレセプター」、放射線科有本昇教授の「MRIによる脈管系の診断」等六つのシンポジウムが行われた。また、各種研究会、講演会、談話会にも熱心な討論が行われ、まことに有意義な学会であった。
(増田善昭記)

この他、地方会では10月26、27日に皮膚科岡本昭二教授が会長を務めて、第49回日本皮膚科学会、東日本学術大会が、また10月27日には第70回日本産科婦人科学会関東連合地方部会総会が高見沢裕吉教授の会長のもとで開催された。

解剖慰霊祭と 千葉白菊会総会 挙行政さる

去る十月十九日(土)、午後二時より医学部記念講堂において第58回千葉大学医学部解剖慰霊祭が遺族、大学教職員、医および看護学部並び看護学校学生、白菊会会員ら多数が参加して厳かに挙行政された。医学教育と研究のために本年度献体された三百九体(病理解剖、二五五体、系統解剖、七四体)の御霊に対して黙祷をささげた。主祭僧より各故人の名前が読み上げられ、会場に読経の声が流れる中、参列した遺族は故人をしのんで涙を新にしていた。祭式委員長

服部孝道・安田耕作 共著
神経因性膀胱の
診断と治療
A5判 一八三頁
医学書院 二二〇〇円
(昭和60年9月1日発行)

神経内科の服部孝道助教授と泌尿器科の安田耕作講師は同級生(昭42卒)である。その連携のよさが一つの臓器をめぐる疾患の解説として成功した一例が本書である。著者らは、神経疾患に伴う排尿障害患者を過去六年間に実に千五百名以上取り扱っており、高齢化社会を迎えていよいよ増えるこの種の患者にどの様に対応してい

の吉田亮医学部長が、解剖の重要性を理解し献体を決意された故人とその遺族に対する謝辞述べ、祭式委員長、遺族の順に参列者全員が焼香し、故人の冥福を祈った。

人事異動

「昭和60年8月31日・12月5日」

松井宣夫氏(昭38卒) 名古屋市中大整形外科へ転出
玉置哲也氏(昭38卒) 富山医大より本学整形外科へ転出
石川裕二氏(東北大理、昭46卒)

くかを考えながら、わかり易い入門書を目指して筆を運んだ。専門外の者にも親しみ易い理由の一つに、七十一図、二十一表を配置したこともある。是非一読をおすすめしたい。(S・M)

書評

ハケット著 栗山喬之訳
高山病
(ふせぎ方、なおし方)
新書版 八六頁
山洋社 九五〇円
(昭和58年11月25日発行)

肺癌研究施設内科の栗山喬之講

計報

伊芸 重孝氏(昭25卒、昭54年4月逝去)
草刈 正雄氏(昭15卒、昭55年10月7日逝去)
栗山 元雄氏(大11卒、昭57年6月14日逝去)
山内伴治郎氏(大13卒、昭58年4月21日逝去)
永田幾次郎氏(昭3卒、昭59年2月6日逝去)
岡崎 行雄氏(昭3卒、昭60年3月5日逝去)

編集後記

☆十二月三日に嶋田宗之氏(昭9卒)より本学にプロンズのヒポクラテス像が寄贈されました。本学では今年六月より倫理委員会が発足しております。医師としての職業意識と倫理的責任の必要性をうたったヒポクラテスの「誓い」の持つ重さを考えると、この胸像は本学にとって誠に時期を得た贈り物といえましよう。三月発行の次号で紹介したいと思ひます。

☆本号にも多くの先生方から玉稿を賜りました。厚く御礼申し上げます。

☆よき初春をお迎え下さるようお祈り申し上げます。(徳永 毅)

比留間政一氏(昭16年3月卒、昭60年3月13日逝去)
四倉 健守氏(昭24卒、昭60年7月15日逝去)
大野 信二氏(昭23卒、昭60年9月15日逝去)
齊藤 寿氏(昭7卒、昭60年10月6日逝去)
富塚八十二氏(昭4卒、昭60年11月3日逝去)

叙勲、褒賞その他祝事に関係された方は是非同窓会事務室まで御一報下さい。編集部でも絶えず注意しておりますが、ニュースに接し得ない事態もあります。お喜びはなるべく早く、同窓の皆様にもお分けしたいと思ひますのでよろしくお願い申し上げます。